
お祭り金魚

千草ゆう来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お祭り金魚

【Nコード】

N0504B

【作者名】

千草ゆう来

【あらすじ】

お祭りですくった金魚を前にして、兄と妹の会話。 ややダークです。

「名前、つけないのか」

お兄ちゃんがあたしの手元をのぞき込む。

「名前ねー」

あたしもあたしの手元をのぞき込む。

「どうせ死んじゃうしね」

「またミサはそういうこと言って」

「だって事実じゃん」

あたしの手には、さっき掬ったばかりのお祭り金魚。本当に手のひらに入ってしまうくらいの小さなビニル袋の中で泳いでいる。

「そんなの寂しいだろ」

お兄ちゃんはリアリストのくせして、妙なところでそういう、…なんて言うんだろう、人間らしいことを大事にしたがる。あたしはそんなお兄ちゃんが嫌いじゃないけど、

「でも死んじゃうんだよ？」

「名前がなけりや死んだときにお墓も作ってやれないじゃないか」

「は？ こんな都会でどこに墓なんか作れるって？ だいたい、うちがマンションじゃん」

「そりゃそうだけど」

「母さんが台所の生ゴミに捨てて終わりよ」

「……ミサ」

お兄ちゃんがこうやってため息をつくのは、あたしに説教したいっていうサインだ。でもお兄ちゃんはお義兄ちゃんは、あたしの本当のお兄ちゃんじゃないからってため息をつくだけで終わらせようとする。

だからあたしはお兄ちゃんのため息を聞くたびにどきつとする。今もおそるおそるお兄ちゃんを見上げて、そしてごめんねって言う。お兄ちゃんがもう一度、さっきより軽いため息について、それでこ

の話は終わりだ。

「ねえ、じゃ、お兄ちゃんが名前つけていいよ」

あたしは赤いビニル紐でくられたビニル袋を、視線の高さにかけてみる。何の変哲もない金魚が、ただ赤い体を透明なうろこでキラキラ光らせながら泳がせている。

「なんで俺が」

「だってあたし、名前つけられないもん」

お兄ちゃんはあたしをじっと見た。あたしはえへへとごまかしてそつぽを向く。こういつときのお兄ちゃんの真顔に、勝てるほどあたしはまだ強くない。

「……じゃあ、」

金魚のえさは五年生のときのメダカにあげてた残りがあつたかな。水草は明日にでも買って来よう。

それにしても不思議だね。台所のまな板の上ではお母さんがカレイをさばいているっていうのに、なんであたしはその横で水道水を金魚鉢に注ぎながら、付いたばかりのサカナの名前を呼んでいるんだろう。

——いつか死ぬのにね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0504b/>

お祭り金魚

2011年1月7日15時20分発行